

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：44523

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02097

研究課題名(和文)「被害者の視点を取り入れた教育」の実践に関する研究

研究課題名(英文)A study for practice of "education from the viewpoint of victim"

研究代表者

大岡 由佳 (OOKA, Yuuka)

武庫川女子大学短期大学部・心理・人間関係学科・准教授

研究者番号：10469364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：加害者の贖罪指導の一環として「被害者の視点を取り入れた教育」が取り入れられているが、効果的な教育方法やその効果は検証されていないままである。どのような被害者の視点を問い入れた教材が意味を成すのかについても検討することが急務である。

研究成果として、被害者の視点として、当事者の映像が効果的であることが分かった。また、それらの映像提供にあたり、実際の生の声の採用や、視聴前の喚起、知識の埋め込みの必要性など、留意すべき点も明らかになった。加害者のみならず、加害者支援者、ならびに、一般市民にも「被害者の視点」を広く共有していくことが「被害者の視点を取り入れた教育」を社会に広めることになると結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少年犯罪被害の遺族、殺人被害で未解決事件の遺族、児童虐待、いじめ、強制性交等にあった被害者から実際にヒアリングおよび動画撮影協力をしてもらい、教材化まで行ったことに社会的意義がある。それらの動画に含むべき内容の検討や動画の見せ方、効果的な方法の検討を行ったところにも、学術的意義がある。

「TICCこころのケガを癒やすコミュニティ事業」<https://www.jtraumainformed-tic.com/> と連携し、会員ページから登録したら無料で被害当事者の動画等から学べるオンライン講座を公開している。上記ホームページから誰でも視聴は可能である。

研究成果の概要(英文)：Although "education that incorporates the victim's perspective" has been introduced as part of redemption instruction for perpetrators, effective teaching methods and their effectiveness remain unexamined. It is also urgent to examine what kind of teaching materials that incorporate victims' perspectives make sense.

As a result of our research, we found that videos of the victims themselves are effective from their point of view. In addition, it became clear that there are some points to keep in mind when providing these videos, such as the need to adopt actual voices, to arouse the viewers before viewing, and to embed knowledge in the videos. It was concluded that sharing "victims' perspectives" not only with perpetrators but also with their supporters and the general public would help spread "education that incorporates victims' perspectives" throughout society.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：被害者の視点 教育教材 トraumainフォームドケア

1. 研究開始当初の背景

加害者が再加害を起こさないように犯罪被害者等の心情等を理解させるための「被害者の視点を取り入れた教育」や、贖罪のための指導を行うことが第3次犯罪被害者等基本計画に新たに盛り込まれた。「再犯の防止等の推進に関する法律(再犯防止計画)(平成28年施行)」基本計画においても同様の視点が盛り込まれた。しかしながら、実際には、再犯率や被害者への賠償未払いや再犯の高い実態からみた時、犯罪被害者等が望んでいる適切な悔い改めるための教育・指導は実施されているとはいえない状況にあった。被害者らは加害者からの誠実な謝罪や賠償もない中で、加害者の態度に怒りとやるせなさを感じてきた。果たして、犯罪被害当事者が納得できる、かつ、加害者が真に悔い改め、その結果、再犯の減少や、賠償金の支払い率の上昇につながるような「被害者の視点を取り入れた教育」は果たして実施可能かつ効果があるのだろうか。かりに、真の「被害者の視点を取り入れた教育」が存在するのであれば、それは、被害当事者不在になりがちな加害者支援分野に、犯罪被害当事者の視点を踏まえた実践であるべきではないか。被害者の想いに沿った、かつ学術的なエビデンスに基づく実践プログラムの考案・提言がなされ、加害者が真に悔い改めるのであれば、犯罪被害者の二次被害は軽減する可能性が高まり、加害者にとっても新たな被害を生むことの抑止力として機能するのではないかと考えた。どのような被害者の視点を問い入れた教材が意味を成すのかについても検討する必要がある。

2. 研究の目的

- (1)「被害者」の視点が意味するところが明らかになっていないため、その被害者の視点をどう考えるかについて検討を行う。
- (2)教育教材として成立させるにあたり、「被害者の視点」をどのように見せることが効果的かについて検討する。
- (3)加害者支援者のみならず、様々な対人援助職に「被害者の視点を取り入れた教育」を普及させる策を検討する。

3. 研究の方法

- (1)被害者団体と標榜している当事者団体、また、地方公共団体へのフィールドワークや、矯正施設職員へのヒアリングを通して検討した。そのヒアリング結果は、関係者にて検討を重ねた。
- (2)教育教材モデルの検討のため、教育媒体作成ワーキンググループを立ち上げ検討を行った。一部、職能団体の協力を得て、被害者の声を取り入れた紙媒体の冊子を作製した。被害者の声を広く伝える方法として、被害者のインタビュー動画を制作した。動画撮影にあたっては、被害当事者らに出演を依頼し、インタビュー形式で聞き取り調査を行った。研究代表者の大学倫理審査委員会の承認を得て行った。視聴等をした者らの結果から、より良い「被害者の視点」の見せ方を検証した。
- (3)被害者の視点を伝える対象は、矯正施設入所者にとどまらず、そこで支援する者達や、地域で対象者を迎え入れ支援する者達も含まれるため、それらの多様な支援者に届く方策を、様々な関係者からヒアリングを行い検討した。

4. 研究成果

(1) フィールドワークから分かったこと

当事者の生の声を採用する必要性

被害当事者団体8団体にフィールドワークを行い、ヒアリングを行った。結果、「被害者の視点」を伝えるにあたって、生の声に勝るものはないとの視点が得られた。

被害者の視点の内容

「被害者の視点」で交えることとして、1.被害者となった出来事自体、2.被害者の影響(呈するトラウマ・症状)、3.被害者の置かれている状況が伝えるべきことに盛り込まれるべき必要があると結論づけた。

被害者といっただけに、殺人・傷害、強制性交等に加え、虐待の被害者も教材対象に採用すべきことがトラウマインフォームドな見地から見たとき重要だと考察された。

(2) 被害者の教育教材を提供する際の工夫

紙媒体資料の作成

当事者理解小冊子の作成:犯罪被害者の視点を専門職教育に入れ込むために、日本精神保健福祉士協会の司法精神保健福祉委員会の協力を得て、「被害者(犯罪被害にあった人)のことは知っていますか/加害者(犯罪をした人)のことは知っていますか」(小冊子)を作成印刷した()。初年度に行ったヒアリング結果も掲載した。作成時の工夫として、1.被害者の声を効果的に掲載する事、2.(加害関係者にすんなり被害者のことが



頭に入るよう)被害のこともだけでなく、加害のことも取り上げる体裁にしたこと、3.トラウマインフォームドな見地から、被害も加害もどちらも生きづらさをもって生きているというメッセージの共有を掲載した。それによって、加害者・加害関係者が、被害者のことも他人事ではないと思える工夫を施した。全国の保護観察所、矯正機関、精神保健福祉士の各支部に送付した。なお、その冊子を活用した専門職研修会にて効果検証を行う予定であったが、COVID-19の影響により中止された。

()以下からダウンロード可能

<https://www.jamhsw.or.jp/ugoki/hokokusyo/202003-shiho/SWhandbook-all.pdf>

被害者のインタビュー動画の作成と教材の検証

職能団体である日本精神保健福祉士協会の司法精神保健福祉委員会のオンライン研修(N=46)にて教材モデル動画を上映し、その効果検証を行ったテキストマイニングの結果から、教材に必要な視点の導き出した。なお、教材モデル動画の構成は、〔イラストによる被害状況の想起〕と、〔実際の被害者の声〕を採用した。(右スライド参照)



1. 教材作成時の留意点

教材を視聴し、調査協力を得られた者は46名であった。男性15名(32%)・女性31名(67%)、年代は40代17名(37%)、30代11名(24%)、50代10名(22%)等で、所属機関は、刑事司法関連機関(矯正施設、保護観察所等)・精神科病院・精神科診療所、障害者福祉サービス等であった。その調査の結果から導き出されたことは以下の通りであった。

〔教材作成時の留意点〕

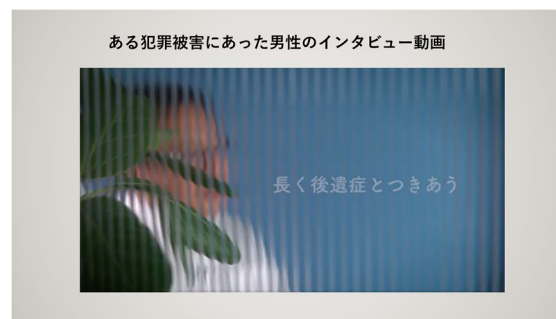
1. 犯罪被害者等の実態を知ってもらうことが大切であり、生の当事者の状況を知る機会は重要であった。
2. 現場で、犯罪被害者等の基礎知識、支援の方法を拡充していく必要があった。
3. 恐怖や怒りを含む被害者生映像にて被害者の実情を知ってもらうことは、あまりに感情的に圧倒してしまい、人々を尻込みさせてしまう可能性があった。
4. 段階的に被害者のことを伝えるような教育的取り組みが求められていた。
5. 映像を視聴してもらう前に、事前の喚起が必要であった。
6. 映像だけを見せるのではなく、事前の講義等、準備性を整えて視聴させないと、悪影響になる可能性があった。
7. PTSD症状等の理解を促す項目も埋め込むことも求められていた。
8. 作画的なイラストや、役者の演技は、視聴者の共感呼びづらかった。

〔「被害者の視点」で伝えるべきメッセージの核〕

分析から、犯罪被害者についての視聴者の感想として、「決して時間が解決するというのではないこと」「被害体験による終わりのない苦痛が続くということ」「被害者の生きづらさ」と要約できた。感情部分では、「恐れ」「悲しみ」といった感情がポジティブな感情よりも上回ることから、生映像の視聴後に、この理解を、どのように被害者の実際の認識につなげ、被害者の対応を行うか、被害者に2次被害を与えないような行動にもっていけるかについて、教育的アプローチを入れていく必要性が浮かび上がった。これは、米国・SAMSHAが掲げるトラウマインフォームドケア概念でいうところの4R(Realize-Recognize-Respond-Resist re-traumatization)のアプローチの流れと合致していた。

(3) 広く伝える被害者支援の必要性

少年犯罪被害の遺族、殺人被害で未解決事件の遺族、児童虐待、いじめ、強制性交等にあった被害者らの二次被害や症状等に焦点をあてたグループインタビューを行い、教育コンテンツ動画(総計9本、上映時間各8-15分)を作成した。教材内容は取材対象者(被害者)の確認をもって完成させた。矯正施設職員や保護観察所や、児童養護施設等の研修時に活用し、その効果を測った。被害者の視点について、理論や概念で伝えるよりも、生の声は、視聴者の心に響き、共感を呼びやすいことが分かった。自分の身には起こる可能性があると思ったときに、共感しやすいことも明らかになった。被害者の視点を社会に共有するツールとして、「TICC ころのケガを癒やすコミュニティ事業」<https://www.jtraumainformed-tic.com/>と連携し、会員ページから登録したら無料で被害当事者の動画等から学べるオンライン講座を無料公開した。そのオンライン教材事業に組み入れることができた結果、教材は、2023年3月末時点で794名に視聴された。今後も、上記ホームページから視聴は可能である。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大岡由佳、肥後有紀子、岩切昌宏	4. 巻 第2巻
2. 論文標題 逆境的小児期体験の影響 成人2事例の語りから.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校安全推進センター紀要	6. 最初と最後の頁 46-55.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 Vol13.No.2.
2. 論文標題 犯罪被害者等支援と福祉連携.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科Resident.	6. 最初と最後の頁 2-3.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 47 (5)
2. 論文標題 ソーシャルサポートと複雑性PTSD (特集 複雑性PTSDと接する : さまざまな治療的アプローチ).	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 632-634
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 11月号
2. 論文標題 犯罪被害者の人権	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ひょうご人権ジャーナルきずな	6. 最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 令和2年12月号
2. 論文標題 これからの更生保護に必要な視点 トraumainフォームドケア .特集:これからの更生保護事業.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 更生保護.	6. 最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 第230号
2. 論文標題 第1回 トraumam・インフォームドケア (TIC) 概論.連載タイトル: トraumam・インフォームドケア特集 トraumamレンズをかけていますか?.)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PSW通信	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳、柏木一慧	4. 巻 第231号
2. 論文標題 第2回 トraumam・インフォームドケア (TIC) 精神医療編.連載タイトル: トraumam・インフォームドケア特集 トraumamレンズをかけていますか?.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PSW通信	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 50(5)
2. 論文標題 【性暴力被害者への支援現状と課題】地方公共団体における犯罪被害者支援総合対応窓口調査報告 から (解説/特集).	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域保健	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚 淳子、大岡 由佳、寺川 太佳子	4. 巻 51(1)
2. 論文標題 サインの発信や受信が困難な子ども等への犯罪被害者等支援に関する研修(支援者支援)の重要性.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神保健福祉	6. 最初と最後の頁 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 2月号. 66(2)
2. 論文標題 伊藤富士江・大岡由佳(2019)犯罪被害者支援における多機関連携の実態.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『厚生と指標』	6. 最初と最後の頁 6-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 関口 暁雄、大岡 由佳、大屋 未輝 他	4. 巻 50巻1号
2. 論文標題 司法現場における精神保健福祉士の実態と課題 司法精神保健福祉委員会報告(会議録)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神保健福祉 (1345-2231)	6. 最初と最後の頁 72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大岡由佳	4. 巻 49巻3号
2. 論文標題 【司法精神保健福祉領域におけるPSWの挑戦;加害と被害をこえて】被害者の理解と支援(解説/特集)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神保健福祉	6. 最初と最後の頁 246-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuuka Ooka
2. 発表標題 Sharing Perspectives Connecting Perpetrators and Victims-Trauma Informed Care.
3. 学会等名 The 12th Annual Conference of the Asian Criminological Society (ACS2020) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大岡由佳
2. 発表標題 犯罪被害者支援の必要性 - 加害者支援の対にある被害者支援への福祉専門職の関与に向けての教育の在り方 - .
3. 学会等名 日本社会福祉学会 第69回秋季大会.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大岡由佳
2. 発表標題 「トラウマインフォームドな実践 アートでみる精神障害者のトラウマ」
3. 学会等名 第19回日本トラウマティック・ストレス学会. オンデマンド配信.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大岡由佳
2. 発表標題 「障害者施設職員のメンタルヘルス調査 からみる労働状況(2) - いじめ・セクハラ・パワハラの実態に焦点をあてて」
3. 学会等名 日本社会福祉学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大岡由佳
2. 発表標題 「犯罪被害者支援の多機関連携調査の実態からみえてくるもの」「犯罪被害者の権利擁護とサポート」
3. 学会等名 日本トラウマティックストレス学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大岡由佳、大屋未輝、山田真紀子
2. 発表標題 「司法分野に関与する精神保健福祉士の 支援の現状と課題」
3. 学会等名 日本司法福祉学会第19回全国大会 東海大会自由研究発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大岡由佳、伊藤富士江、大塚淳子
2. 発表標題 「犯罪被害者支援における実質的支援の必要性 TIC(トラウマインフォームドケア)の視点から」
3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川野健治、伊東由康、大岡由佳、河上友信、齋藤絢子
2. 発表標題 「外因死の遺族支援に向けたアクションリサーチ(2) 外因死遺族ケアのためのリーフレット作成。」
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 大岡由佳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 158
3. 書名 「第13章 支援者支援：トラウマ・インフォームドケア理解の心理教育」大江美佐里編『トラウマの伝え方：事例でみる心理教育実践』	

1. 著者名 大岡由佳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 305
3. 書名 「犯罪被害者等の支援」『現代の精神保健の課題と支援』	

1. 著者名 大岡由佳（一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 編集）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 278
3. 書名 「犯罪被害者等支援に関する制度の概要」『刑事司法と福祉』社会福祉士・精神保健福祉士養成講座.	

1. 著者名 大岡由佳（監修：諸澤英道）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 被害者が創る条例研究会	5. 総ページ数 30
3. 書名 『すべてのまちに被害者条例を 第3版』	

1. 著者名 大岡由佳他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 公益社団法人日本精神保健福祉士協会	5. 総ページ数 14
3. 書名 「被害者（犯罪被害にあった人）のこと知っていますか／加害者（犯罪をした人）のこと知っていますか」（小冊子）	

1. 著者名 大岡由佳他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 内閣府	5. 総ページ数 31
3. 書名 性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターを対象とした支援状況等調査。（「調査結果の分析」部分執筆）	

1. 著者名 大岡由佳他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 222
3. 書名 「犯罪被害者支援とメンタルヘルス」『精神保健医療福祉白書』p50	

1. 著者名 大岡由佳他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 357
3. 書名 「犯罪被害者の精神保健」『新・精神保健福祉士養成講座 精神保健の課題と支援 第3版』（第8章 第3節）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究課題により作成した動画は、「TICCこころのケガを癒やすコミュニティ事業」<https://www.jtraumainformed-tic.com/> と連携し、会員ページから登録したら無料で視聴できるオンライン講座内にて公開。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	肥後 有紀子 (HIGO Yukiko) (60550770)	武庫川女子大学・生活環境学部・准教授 (34517)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関